

水のながれ

永井荷風

青空文庫

戦争後、市川の町はずれにト居したことから、以前麻布に住んでいた頃よりも東京へ出るたびたび隅田川すみだがわの流れを越して浅草の町々を行過る折が多くなつたので、おのずと忘れられたその時々の思出を繰返して見る日もまた少くないようになつた。

隅田川両岸の眺めがむかしとは全然変つてしまつたのは、大正十二年九月震災の火で東京の市街が焼払われてから後のちの事で、それまでは向嶋むこうじまにも土手があつて、どうにか昔の絵に見るような景色を見せていた。三圍稻荷みめぐりいなりの鳥居が遠くからも望まれる土手の上から斜に水際に下ると竹屋たけやの渡しと呼ばれた渡場わたしばの桟さんば橋はしが浮いていて、浅草の方へ行く人を今戸の河岸かわぎしへ渡してい

た。渡場はここばかりでなく、枕橋^{まくらばし}の二ツ並んでいるあたりからも、花川戸^{はなかわど}の岸へ渡る船があつたが、震災後^{かしじどおり}河岸通の人家が一帯に取払われて今見るような公園になつてから言問橋^{ことといばし}が架けられて、これは今戸へ通う渡しと共に廃止された。上流の小松島から橋場^{はしば}へわたる渡船も大正の初めには早く白鬚橋^{しらひげばし}がかけられて乗る人がなくなつたので、現在では隅田川に浮ぶ渡船はどこを眺めても見られなくなつた。

わたくしはこれらの渡船の中で今戸の渡しを他処のものよりも最も興味深く思返さねばならない。何故かと云うと、この渡場は今戸橋の下を流れる山谷堀^{さんやぼり}の川口に近く、岸に上るとすぐ目の前に待乳山^{まつちやま}^{そび}の堂宇と樹木が聳えていた故である。しかしこの堂宇

は改築されて今では風致に乏しいものとなり、崖の周囲に茂つて
 いた老樹もなくなり、岡の上に立つていた戸田茂睡とだもすいの古碑こひも震災
 に砕かれたまま取除とりのけられてしまつたので、今日では今戸橋から
 この岡を仰いで、「切きれ廻だこの夕ゆう越あたりえ行くや待乳山」の句を思出
 ても、むかし味つたようなこの辺あたりの町の幽雅な趣を思返することは
 出来ない。むかし待乳山の岡の下には一條ひとすじの細い町があつて両
 側に並んでいる店付の質素な商店の中には、今戸焼の陶器や川魚
 の佃つくだ煮にを売る店があつて、この辺一帯の町を如何にも名所らし
 く思わせていたが、今はセメントで固めた広い道路となつてトラ
 ックが砂すな煙けむりを立てて走つてゐる。また今戸橋の向岸には慶けいよ
 養うじ寺という古寺があつてここにも樹木が生茂おいしげつてゐたが、今

はもう見られないでの、震災前のむかしを知らない人たちには何の趣もない場末の道路としか見られないようになつたのも尤でもつともある。平坦な道路は山谷堀の流に沿うて吉原の土手をも同じような道路にしたのみならずその辺に残つていた寺々をも大抵残るものなく取払つてしまつた。むかしからの伝説は全く消滅して残る処は一つもない。

今戸橋をわたると広い道路は二筋に分れ、一つは吉野橋をわたつて南千住みなみせんじゅに通じ、一つは白鬚橋びしゆばしの袂たもとに通じているが、ここに瓦斯タンクが立つていて散歩の興味はますますなくなるが、むかしは神明神社の境内けいだい内で梅林もあり、水際には古雅な形の石燈籠とうろうが立つていたが、今は石炭を積んだ荷船にぶねが幾艘いくそくとなく繋つなが

れているばかり、橋 向はしむこう にある昔ながらの白鬚神社や水神の祠の眺望までを何やら興味のないものにしているのも無理はない。向嶋の堤防はこの辺までも平に地ならしされて、同じように自働車やトラックの疾走する処にしている。百花園ひやつかえん は白鬚神社の背後にあるが、貧し気な裏町の小道を辿つて、わざわざ見に行くにも及ばぬであろう。むかし土手の下にさきやかな門をひかえた長ち 命寺ようめいじ の堂宇も今はセメント造づくり の小家こいえ となり、境内の石碑は一つ残らず取除うし かれてしまい、牛の御前ごぜん の社殿は言問橋ことといばし の袂に移されて人の目にはつかない。かくの如く向嶋の土手とその下にあつた建物や人家が取払われて、その跡が現在見るような、向嶋公園と呼ばれる平坦な空地になつたのだ。これは荒川の河流が放水路

の開通と共に、如何に険悪な天候にも決して汎濫する恐れがなくなつたためかとも思われる。吉原の遊廓外にあつた日本堤の取崩されて平かな道路になつたのも同じ理由からであろう。実例としては明治四十三年八月に起つた水害の後、東京の市民は幾十年を過ぎた今日に至るまで、一度も隅田川の水が上野下谷の町々まで汎濫して来たような異変を知らない。その代り河水はいつも濁つて澄むことなく、時には臭氣を放つことさえあるようになつたのも、事に一利あれば一害ありで施すべき道がないものと見える。浅草の觀音菩薩は河水の臭氣をいとわぬ参詣者にのみ御利益を与えるのかも知れない。わたくしは言問橋や吾妻橋を渡るたびたび眉を顰め鼻を掩いながらも、むかしの追憶を喜ぶ

あまり欄干らんかんに身を倚せて濁つた水の流を眺めなければならぬ。水の流ほど見てゐるものに言ひ知れぬ空想の喜びを与えるものはない。薄く曇つた風のない秋の日の夕暮近くは、ここのみならず何處いづこの河、いづこの流れも見るには最もよき時であろう。江戸時代からの俗謡にも「夕暮に眺め見渡す隅田川……。」というのがあつたではないか。

青空文庫情報

底本：「荷風隨筆集（上）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年9月16日第1刷発行

2006（平成18）年11月6日第27刷発行

底本の親本：「荷風隨筆 五」岩波書店

1982（昭和57）年3月17日第1刷発行

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年3月8日作成

2019年12月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

水のながれ

永井荷風

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>